

原著論文

養育期におけるFamily Confidenceモデルの構築

Development of the Family Confidence Model in the Nurturing Phase

岩崎 順子 (Junko Iwasaki)^{*1} 中野 綾美 (Ayami Nakano)^{*1}
野嶋 佐由美 (Sayumi Nojima)^{*1}

要 約

本研究では、家族のもつ力を高める看護への示唆を得るために、Family Confidenceに関連する要因を明らかにし、養育期におけるFamily Confidenceモデルを構築することを目的とした。養育期の家族2,500家族を対象に、Family Confidence Questionnaireおよび関連要因に関する質問紙調査を実施し、ステップワイズ法による重回帰分析、及びモデルについて共分散構造分析、多母集団同時分析を行い検討した。有効回答数は723名であり（回収率20.40%、有効回答率96.02%）、共分散構造分析の結果、Family Confidenceへのパス係数 [家族の生活の質：外的側面] 0.38、[家族からのサポート] 0.31、[自己効力感] 0.21、[家族の成功体験] 0.08の順に高く、養育期におけるFamily Confidenceモデルが構築された。また、多母集団同時分析結果より父親・母親別モデルの成立がみられた。家族内外の様々なシステムへの階層性の視点からFamily Confidenceを高めていく支援の必要性が示唆された。

Abstract

The purpose of to obtain suggestions for nursing care that enhances the power of the family, related factors associated with family confidence, and family confidence model in the nurturing phase was developed. The family confidence questionnaire and related questionnaires were administered to 2,500 families (fathers and mothers with children aged 0 to 19 years). The model was validated using multiple regression analysis, structural analysis of covariance, and simultaneous multi-population analysis. The results were the number of valid responses was 723 (response rate: 20.40%; valid response rate: 96.02%). The path coefficients for family confidence were 0.38 for “family quality of life: external aspect,” 0.31 for “family support”, 0.21 for “self-efficacy”, and 0.08 for “family experiences of success”, indicating that the family confidence model was established in the nurturing phase. Hence, the family confidence model was validated. Additionally, the results of the simultaneous multi-population analysis indicated that models of father and mother were established. Family confidence during the nurturing phase was found to be related to “family quality of life,” “family support,” “self-efficacy,” and “family experiences of success,” validating the family confidence model and implying the necessity of support to increase family confidence from a hierarchical perspective regarding various systems within and outside the family.

キーワード：Family Confidence モデル 養育期

I. はじめに

近年、人口の少子高齢化が急速に進展するなか、わが国の家族は単独世帯が増加しており世帯構造は「単独世帯」が最も多く、次いで「夫婦と未婚の子のみの世帯」、「夫婦のみの世帯」となっている（厚生労働省，2019）。これら家族

の個人化、核家族化を背景に家族の機能低下、脆弱化があげられる（広井，2019）。看護は、ゆらぎ、困難を抱える家族に対して、個人・家族・地域等にケアを提供する重要な役割を担っている。特に、家族看護は、家族の健康や家族のセルフケアの向上を目指して、看護者には家族の持てる力を最大限に発揮できるように支援する

*1 高知県立大学看護学部

ことが最も重要な課題であり、家族の主体性と潜在的な能力をエンパワーする姿勢をもって、家族の力が発揮できるように支援することが求められている（野嶋，2007）。当事者である家族が問題解決の主体となり、家族のエンパワーメント過程に即して理解し支援を行っていくことが望まれる。

この家族の力に注目した概念としてFamily Confidenceがあげられる。Family Confidenceは、新たな家族の力に関する概念であり、家族が過ごす日常生活の中での日々の「家族の問題解決」や、状況に応じて対応することができる「家族の柔軟さ」、家族がゆったりと落ち着いて構えることができる「家族のゆとり」、先への大まかなイメージや希望といった「家族の目標・希望」が含まれており、家族ならではの独自の工夫や、ゆるやかさ、柔軟さが含まれており、家族が安心し、家族らしく、ゆとりをもち、そして挑戦していく力へと導いていく鍵となる概念でもある（岩崎ら，2021a；岩崎ら，2021b）。家族自身が自らの意思をもち、家族自身を信じる力の源がFamily Confidenceであり、全ての家族のライフサイクルに活用できる普遍的な概念である。

なかでも養育期にある家族は子どもの誕生に伴う家族の役割・家族の関係性の調整、子どもの発達に伴う子どもの養育や社会化、子どもの解き放しの調整、家族間でのコミュニケーションの確立など様々な発達課題を抱えている（中野，2005）。これら家族の発達課題と関連しながら、家族は子育てに関して育児不安や虐待など様々な問題も抱えており、牧野（2009）は地域社会の眼から自由になった近代家族の子育てに関して、閉じこめられた家族の怖さについて述べている。看護者は、これらの家族の課題の達成に向けて、家族の持てる力を最大限に発揮できるように、家族の主体性と潜在的な能力をエンパワーする姿勢が必要である（野嶋，2007）。

そこで本研究では養育期にある家族のFamily Confidenceに注目し、Family Confidenceモデルの構築を行っていく。Family Confidenceモデルを明らかにすることで、一様ではない、様々な家族を取り巻く関連要因を踏まえてFamily Confidenceを捉えていくことができ、有用な看護援助を導くことができると考える。

II. 研究目的

本研究では、家族のもつ力を高める看護への示唆を得るために、Family Confidenceに関連する要因を明らかにし、養育期におけるFamily Confidenceモデルを構築することを目的とした。

III. 研究方法

1. 研究の枠組み

Family Confidenceを中心概念とし、先行研究に基づき（岩崎ら，2021a；岩崎ら，2021b）研究の枠組みとして図1を作成した。

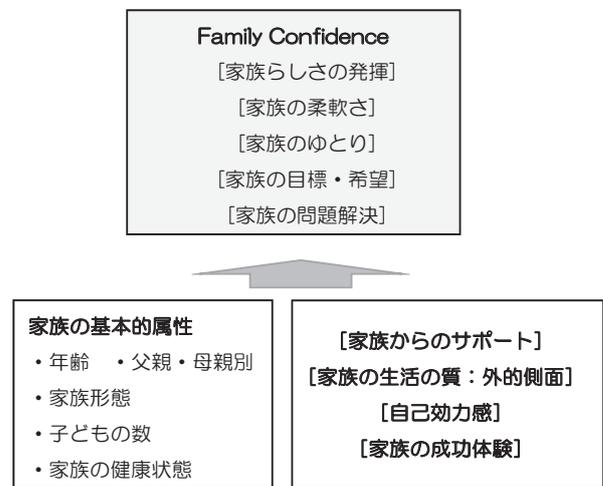


図1 研究の枠組み

1) Family Confidence

Family Confidenceは先行研究より、「家族が、家族らしさを発揮しながら、家族の目標・希望をもち、家族の問題を解決し、柔軟に、ゆとりをもつてのぞんでいく家族の自信」として定義づけた（岩崎ら，2021a；岩崎ら，2021b）。

2) Family Confidenceの関連要因

本研究において、Family Confidenceの関連要因は、先行研究（岩崎ら，2021a）より導き出された「家族からのサポート」、[家族の生活の質：外的側面]、[家族の成功体験]、[自己効力感]とした。また、Family Confidenceは家族の基本的な属性とも関連しているものとし、家族の基本的な属性は、家族員の年齢、父親・母親別、家族形態、子どもの数、家族の健康状態とした。

2. 対象者

養育期における家族（長子が0から19歳までの子どもをもつ父親・母親）2,500家族を対象とした。

3. 測定用具

1) 家族の基本的属性に関する項目

家族の基本的属性に関する項目は、①年齢、②父親・母親別、③家族形態、④子どもの数、⑤家族の健康状態の5項目とした。

2) Family Confidence Questionnaire

岩崎ら (2021b) が開発したFamily Confidence Questionnaire (5因子版) を用いた。Family Confidence Questionnaireは「家族らしさの発揮」「家族の柔軟さ」「家族のゆとり」「家族の目標・希望」「家族の問題解決」の5つの因子、42項目から構成されている (5段階尺度:「1点:全く自信がない」～「5点:とても自信がある」)。

3) 家族からのサポート質問紙

野嶋、岸田、中野ら (1993) により開発された家族からのサポート質問紙を用いた。家族からのサポート (以下「家族からのサポート」) は、家族員が自分の家族から受け取っていると認知しているサポートとして定義され、因子: 家族からの「注目」「保証」「好意」「養護」「助力」 (以下、「FS:注目」「FS:保証」「FS:好意」「FS:養護」「FS:助力」)、13項目から構成されており (5段階尺度:「1点:全くそうでない」～「5点:全くそうである」)、信頼性・妥当性が検証されている (野嶋ら, 1993; 浅岡, 2020; 金正, 2018)。

4) 家族の生活の質: 外的側面に関する質問紙

中野、宮田、野嶋 (1998) らにより開発された家族の生活の質に関する質問紙を用いた。家族の生活の質は、一家族員が家族の生活に対して持っている主観的指標として定義されており、信頼性・妥当性が検証されている (中野ら, 1998)。本研究では、先行研究 (岩崎ら, 2021a) に基づきFamily Confidenceと関連する家族の生活の質に関する質問紙のうち外的側面である「社会参加」「親戚関係」「ソーシャルサポート」

(以下、「家族の生活の質: 外的側面」)、「FQOL: 社会参加」「FQOL: 親戚関係」「FQOL: ソーシャルサポート」)、11項目を用いる (5段階尺度:「1点:全くそうでない」～「5点:全くそうである」)。

5) 一般性自己効力感尺度 (GSES)

一般性自己効力感尺度 (GSES) は、坂野ら (1986) が開発した個人が日常生活の中で示す一般的な自己効力感の強さを測定する尺度を用いた。自己効力感 (以下「自己効力感」) は、自分にはこのような行動が、この程度できるという見込みとして定義されており、「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」 (以下「SE: 行動の積極性」「SE: 失敗に対する不安」「SE: 能力の社会的位置づけ」) の16項目から構成されており (尺度: 2件法「1点: はい」「0点: いいえ」)、信頼性・妥当性が検証されている (坂野, 1986; 坂野, 1989; 陳, 2003)。

6) 家族の成功体験

本研究では、先行研究による質問項目を参照し、「家族で成功したと感じる体験 (大きな成功でも小さな成功でも「うまくいった」と感じる経験) はありますか」の1項目を作成した (4段階尺度:「1点: 全くなかった」～「4点: たびたびある」) (以下「家族の成功体験」)。

4. データ収集方法

対象は、病院での生後1か月・4か月・10か月児健診受診者の家族、保健センターにおいて各種健康診査 (4か月・1歳6か月・3歳児健診) 受診者の家族、離乳食教室受講者、子育て支援センター来所中の家族、個人ネットワークを用いた子育て中の家族合計2,500家族とした。各対象者に対して研究者または研究協力施設担当者より質問紙の配布を行い、回収は各自で郵送とした。研究の同意は、質問紙への返信をもって、同意と判断した。データ収集期間は、2019年5月～9月であった。

5. データ分析方法

Family Confidenceと家族の基本的属性について、父親・母親別、子どもの数（1人・2人以上）、家族の健康状態（健康・健康上の問題あり）、家族形態（核家族・複合家族）の群間での差があるかをLeveneの検定の等分散性の確認後、t検定をおこなった。また、Family Confidenceと年齢（対象者の年齢、長子の年齢）についてPearsonの相関係数を用いて分析をおこなった。

家族の基本的属性および[家族からのサポート]、[家族の生活の質：外的側面]、[自己効力感]、[家族の成功体験]との関連についてステップワイズ法による重回帰分析を用いた。その後、Family Confidenceモデル検証について、共分散構造分析を行った。また、家族の基本的属性別でのモデルの比較について多母集団同時分析を用いて行った。モデルの適合度は、GFI、AGFI、CFI、RMSEAを採用し、採択基準を、GFI、AGFI、CFIは0.90以上、RMSEAは0.05以下とした。尚、全ての分析はSPSS Statistics version25.0を使用し、有意水準を5%未満とした。

6. 倫理的配慮

本研究は、高知県立大学研究倫理委員会の承認（看研倫18-66）を得た後、病院施設での臨床研究審査会での承認を得て実施した。研究協力施設、研究協力者に対して、研究参加への自由意思の尊重、研究協力およびその撤回の自由、プライバシーの保護、研究によって生じる心身の負担、不利益な危険性に対する配慮、研究により受ける利益や看護上の貢献、データ管理、研究結果の公表の仕方に対する倫理的配慮を行い、実施した。

IV. 結 果

1. 対象者の概要

質問紙の回答が得られたのは753人であり、回収率20.40%であった。そのうち回答が1項目でも無効であった30人を除外とし、最終、723人（父親267人、母親456人）を分析対象とした（有効回答率96.02%）。対象者の平均年齢は、父親38.36±7.38歳（範囲：23-70歳）、母親36.67±3.08

歳（範囲：25-53歳）であった。家族員人数は2～7人の範囲、4人家族が302人（41.77%）と最も多かった。また、子どもの人数の範囲は1～5人の範囲で、2人が319人（44.12%）と最も多く、長子の平均年齢は5.61±5.32歳（範囲：0-19歳）であった。

2. 養育期におけるFamily Confidenceと家族の基本的属性との関連

Family Confidenceと家族の基本的属性との関連では、いずれも等分散性でありt検定を用いて分析を行った。結果、父親・母親別、子どもの数、家族の健康状態の3項目において、群間での有意な差がみられた（表1）。Family Confidenceは、父親は母親より有意に高く、子どもの数は1人の方が2人以上より高く、家族の健康状態が良好な家族の方が健康上の問題を抱えている家族より有意に高い結果であった。また、家族形態別（核家族・複合家族）での有意差はみられなかった。対象者および長子の年齢とFamily Confidenceとの関連では、Pearsonの相関係数は、対象者の年齢：-0.172、***p<0.001、長子の年齢：-0.144、***p<0.001で関連はみられなかった。

表1 家族の基本的属性との関連 n=723

	人数	Family Confidence Mean±SD	t 値
父親・母親別			
父親	267	152.03 (±27.11)	3.11**
母親	456	145.47 (±27.43)	
子どもの数			
1人	292	151.01 (±27.50)	2.52**
2人以上	431	145.78 (±27.29)	
家族の健康状態			
健康	632	148.81 (±26.96)	2.53**
健康上の問題あり	77	140.40 (±31.45)	
家族形態			
核家族	697	148.22 (±27.43)	1.62
複合家族	26	139.35 (±27.87)	

等分散性のためのLeveneの検定, t検定, **p<0.01, ***p<0.001

3. 養育期におけるFamily Confidence重回帰分析結果

Family Confidenceのステップワイズ法による重回帰分析では、Family Confidence総点を目的

変数とし、研究の枠組みにそって家族の基本的属性および「家族からのサポート」「家族の生活の質：外的側面」「自己効力感」「家族の成功体験」に関する18の説明変数を投入した。すなわち、「FS：注目」、「FS：保証」、「FS：好意」、「FS：養護」、「FS：助力」、「FQOL：親戚関係」、「FQOL：社会参加」、「FQOL：ソーシャルサポート」、「家族の成功体験」、「SE：行動の積極性」、「SE：失敗に対する不安」、「SE：能力の社会的位置づけ」、および家族の基本的属性：対象者の年齢、長子の年齢、父親・母親別、家族形態、子どもの数、家族の健康状態の合計18を選択した。結果、Family Confidenceを説明する9つの変数が抽出された。標準化係数の高かった順に「FS：助力」($\beta=0.224, p<0.001$)、「家族の成功体験」($\beta=0.148, p<0.001$)、「FQOL：ソーシャルサポート」($\beta=0.143, p<0.001$)、「SE：失敗に対する不安」($\beta=0.130, p<0.001$)、「FS：好意」($\beta=0.129, p<0.01$)、「FS：注目」($\beta=0.122, p<0.01$)、「SE：行動の積極性」($\beta=0.120, p<0.01$)、「SE：能力の社会的位置づけ」($\beta=0.100, p<0.01$)、「FQOL：親戚関係」($\beta=0.077, p<0.05$)であり、調整済み R^2 は0.521で説明できる結果であった(表2)。

上記のように、抽出された変数はいずれも「家族からのサポート」の「FS：助力」「FS：好意」「FS：注目」、「家族の生活の質：外的側面」の「FQOL：ソーシャルサポート」「FQOL：親戚関係」、「自己効力感」の「SE：失敗に対する不安」「SE：行動の積極性」「SE：能力の社会的位置づけ」、「家族の成功体験」であり、対象者の属性は抽出されなかった。

表2 養育期におけるFamily Confidenceの重回帰分析結果

	β (標準化係数)	t 値
「FS：助力」	0.224	5.70***
「家族の成功体験」	0.148	4.67***
「FQOL：ソーシャルサポート」	0.143	4.49***
「SE：失敗に対する不安」	0.130	3.73***
「FS：好意」	0.129	3.28**
「FS：注目」	0.122	2.18**
「SE：行動の積極性」	0.120	3.14**
「SE：能力の社会的位置づけ」	0.100	3.07**
「FQOL：親戚関係」	0.077	2.33*

重回帰分析 ステップワイズ法：調整済み $R^2=0.521$, * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$, 分散分析：F値74.12, $p<0.001$

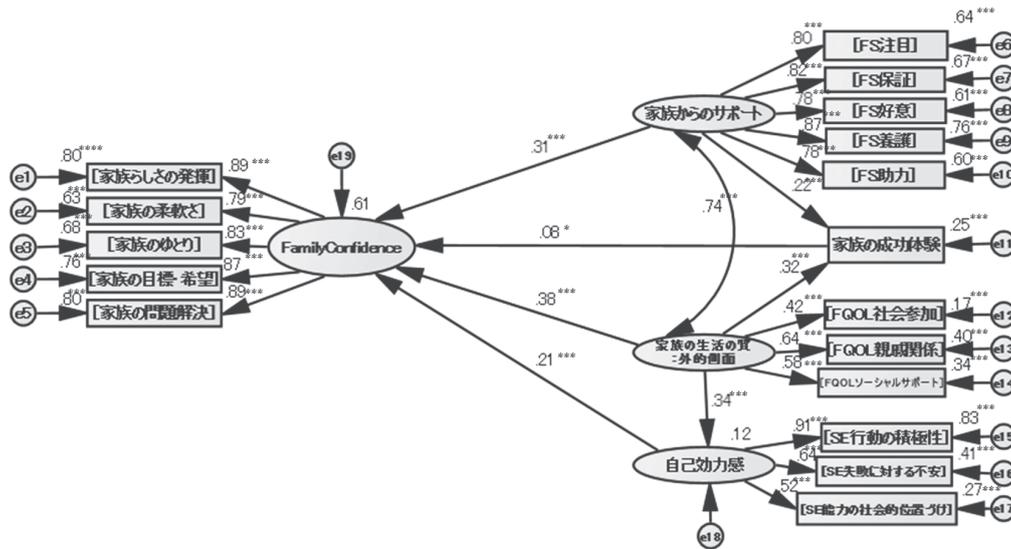
ステップワイズ法による重回帰分析結果より、Family Confidenceは、「家族からのサポート」、「家族の生活の質：外的側面」、「自己効力感」、「家族の成功体験」より説明できる結果であった。

4. 養育期におけるFamily Confidenceモデル

養育期におけるFamily Confidenceモデルについてステップワイズ法による重回帰分析結果に基づき、共分散構造分析を行い検討した。

ステップワイズ法による重回帰分析結果において、Family Confidenceは、「家族からのサポート」、「家族の生活の質：外的側面」、「自己効力感」、「家族の成功体験」より説明できる結果であったことをふまえて、モデルでは、Family Confidenceを、各下位概念を含む「家族からのサポート」、「家族の生活の質：外的側面」、「家族の成功体験」、「自己効力感」から影響をうけるものとした。すなわち、Family Confidence、「家族からのサポート」、「家族の生活の質：外的側面」、「自己効力感」を潜在変数とした。また、観測変数として、Family Confidenceは「家族らしさの発揮」「家族の柔軟さ」「家族のゆとり」「家族の目標・希望」「家族の問題解決」を、「家族からのサポート」は「FS：注目」「FS：保証」「FS：好意」「FS：養護」「FS：助力」を、「家族の生活の質：外的側面」は、「社会参加」「親戚関係」「ソーシャルサポート」、「自己効力感」は、「SE：行動の積極性」「SE：失敗に対する不安」「SE：能力の社会的位置づけ」そして「家族の成功体験」を投入した。また、「家族からのサポート」、「家族の生活の質：外的側面」、「家族の成功体験」、「自己効力感」はそれぞれ関連があるものとしてモデルを作成した。更に、修正指数と適合度指標を参考にモデルの改良を重ね、最終的にモデルとしての適合がみられた図2を採択した。

結果、養育期におけるFamily Confidenceモデルの適合度は、GFI=0.929、AGFI=0.902、CFI=0.954といずれも0.90以上と高く、またRMSEA=0.063であり0.08以下の基準をみたとおり、モデルとしての適合がみられた。Family Confidenceの決定係数は0.61であった。



GFI=0.929 AGFI=0.902 CFI=0.954 RMSEA=0.063 *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

図2 養育期におけるFamily Confidenceモデル

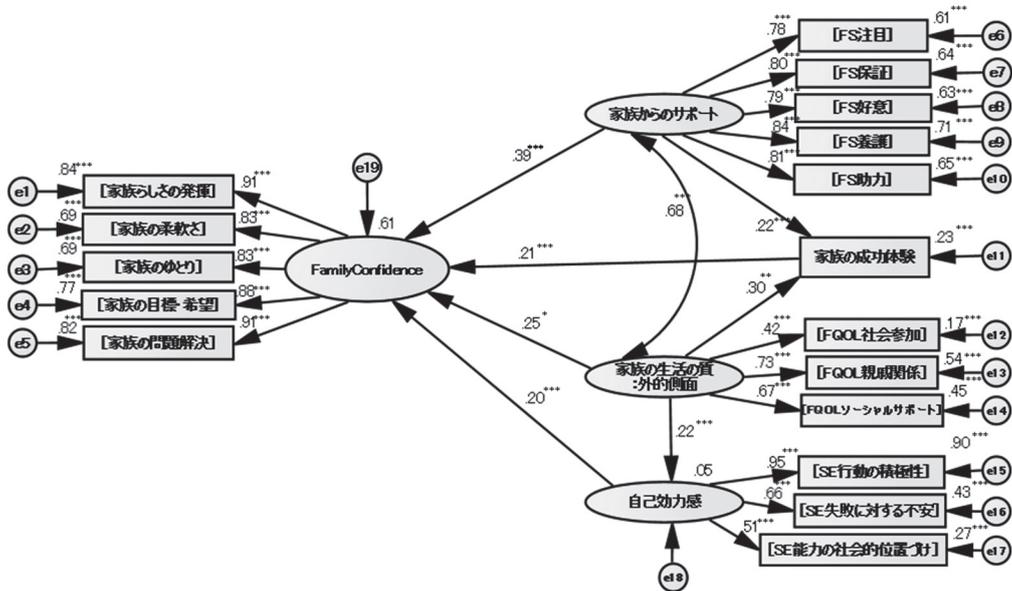
Family Confidenceへのパス係数は「家族の生活の質：外的側面」0.38、「家族からのサポート」0.31、「自己効力感」0.21、「家族の成功体験」0.08であった。尚、Family Confidenceに関しては、5つの観測変数のパス係数は0.79~0.89、「家族からのサポート」に関しては、5つの観測変数のパス係数は0.78~0.87、「家族の生活の質：外的側面」に関しては、3つの観測変数のパス係数は0.42~0.64、「自己効力感」の3つの観測変数のパス係数は0.52~0.91であった。いずれも0.40以上の高い結果を示しており、Family Confidenceを含む「家族からのサポート」、「家族の生活の質：外的側面の外的因子」、「自己効力感」の4つの潜在変数は、下位の因子より構成されていることが説明できる結果であった。

Family Confidenceの本モデルにおいて、それぞれFamily Confidenceへのパス係数は有意に関連しており、「家族の生活の質：外的側面」、「家族からのサポート」、「自己効力感」、「家族の成功体験」が高いほど、Family Confidenceが高まることが示された。中でも「家族の生活の質：外的側面」はFamily Confidenceへのパス係数が0.38と最も高く、Family Confidenceへ最も影響を及ぼす要因であった。また、「家族の生活の質：外的側面」は、「家族からのサポート」とパス係数0.74で高い相関、「家族の成功体験」へのパス係数0.32、「自己効力感」へのパス係数0.34

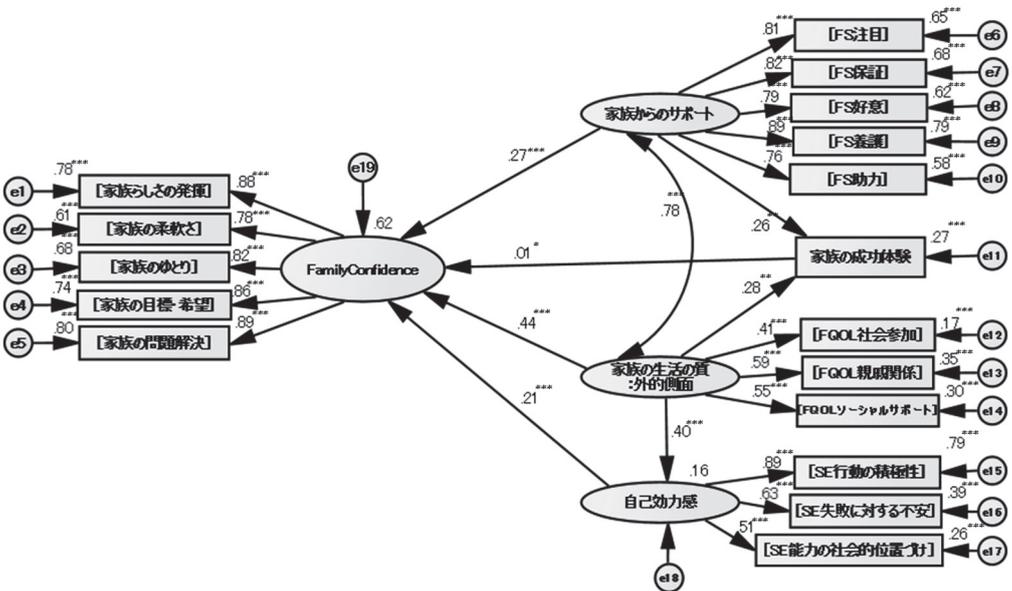
と関連がみられていた。「家族の生活の質：外的側面」は、Family Confidenceへの直接的な関連が最も高いと共に、「家族からのサポート」、「自己効力感」、「家族の成功体験」へも間接的に影響を及ぼしていきながら、Family Confidenceに影響を与えており、モデルにおいて最も影響を及ぼしていた。次いで「家族からのサポート」が、Family Confidenceへのパス係数0.31でFamily Confidenceに影響を及ぼしていた。「家族からのサポート」もまた、「家族の成功体験」へパス係数0.22で間接的にFamily Confidenceにも影響を及ぼしていた。「自己効力感」は、Family Confidenceへのパス係数0.21で影響を及ぼしており、「家族の生活の質：外的側面」から間接的に影響を受けながらFamily Confidenceに関連していた。Family Confidenceへのパス係数が最も低かったのは「家族の成功体験」0.08であった。「家族の成功体験」は、「自己効力感」と同様に「家族の生活の質：外的側面」、「家族からのサポート」といった他の要因から間接的に影響を受けFamily Confidenceに寄与していた。

以上のことから、養育期におけるFamily Confidenceモデルは、「家族の生活の質：外的側面」「家族からのサポート」「自己効力感」「家族の成功体験」が、それぞれ関連しながら、モデルの成立がみられていた。

父親



母親



GFI=0.901 AGFI=0.873 CFI=0.945 RMSEA=0.048 *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

図3 養育期におけるFamily Confidence父親・母親別モデル

5. 養育期におけるFamily Confidence父親・母親別モデル

更に、養育期におけるFamily Confidenceモデルを基準とし、家族の基本的属性群別に多母集団同時分析を用いて検討した。属性については、t検定の結果、群間で有意な差がみられた父親・母親別、子どもの数、家族の健康状態をとりあげ、それぞれ分析を行った。結果、父親・母親別モデルにおいて、モデルの適合度GFI=0.901、AGFI=0.873、CFI=0.945、RMSEA=0.048でモデルとしての成立がみられた(図3)。多母集団同時分析にあたっては、まず、父親・母親それぞれの集団でのモデルの適合度の確認を行い、更に配置不変性と測定不変性を確認し、等値制約モデルである「測定モデルのウエイトモデル」を採択した。父親・母親別Family Confidenceへの決定係数は、それぞれ父親モデルでは0.61、母親モデルでは0.62であった。また、父親・母親別モデルでは、Family Confidenceと4つの要因へのパス係数は異なっており、それぞれ異なる特徴がみられた。

1) 養育期におけるFamily Confidence父親モデル

父親モデルでは、Family Confidenceモデルと同様に、いずれもパス係数は有意に関連しており[家族の生活の質：外的側面] 0.25、[家族からのサポート] 0.39、[自己効力感] 0.20、[家族の成功体験] 0.21であり、これらの要因が高いほど、Family Confidenceが高まる結果であった。

父親モデルの特徴は、Family Confidenceへのパス係数が、[家族からのサポート] 0.39と最も高く、Family Confidenceへ[家族からのサポート]が最も影響を及ぼす結果であった。また、父親モデルでは、[家族の成功体験]がFamily Confidenceモデルや母親モデルと比較してパス係数0.21と高く、Family Confidenceに[家族の成功体験]が高く影響しており、特徴的な側面であった。

2) 養育期におけるFamily Confidence母親モデル

母親モデルでも、Family Confidenceモデルと同様に、いずれもパス係数は有意に関連していた。Family Confidenceへのパス係数は、[家族の

生活の質：外的側面] 0.44で最も高く、次いで[家族からのサポート] 0.27、[自己効力感] 0.21、[家族の成功体験] 0.01の順に高い結果であった。

母親モデルの特徴は、Family Confidenceへのパス係数が、[家族の生活の質：外的側面] 0.44と高い結果であり、また、[家族の生活の質：外的側面]から[自己効力感]へのパス係数が0.40と、父親モデルの0.22よりも高い結果であった。母親モデルでは、[家族の生活の質：外的側面]が最もFamily Confidenceに直接影響すると共に、母親の[自己効力感]にも間接的に影響を及ぼし、Family Confidenceを高める要因として寄与している点も特徴的な側面であった。

V. 考 察

1. 養育期におけるFamily Confidenceモデル

本研究により養育期においてFamily Confidenceと関連する要因について検討した結果、ステップワイズ法による重回帰分析ではFamily Confidenceは[家族の生活の質：外的側面][家族からのサポート][自己効力感][家族の成功体験]に起因する結果であった。共分散構造分析を用いたモデルにおいても、Family Confidenceは[家族の生活の質：外的側面][家族からのサポート][自己効力感][家族の成功体験]が寄与していることが判明し、また、Family Confidenceモデルを基盤とした父親・母親別モデルでモデルとしての成立がみられた。

このことから、養育期におけるFamily Confidenceに対して、社会を取り巻くネットワークに関する側面である[家族の生活の質：外的側面]、家族自身が家族からサポートを得ることができていると認識する[家族からのサポート]、家族員それぞれの[自己効力感]、家族の過去における行動の達成である[家族の成功体験]が深く関連していることが判明した。

以下では、父親・母親別モデル、[家族の生活の質：外的側面][家族からのサポート][自己効力感][家族の成功体験]について考察していく。

1) 養育期におけるFamily Confidence 父親・母親別モデル

多母集団同時分析結果により導き出された養育期におけるFamily Confidence父親・母親別モデルの特徴について述べていく。

(1) 養育期におけるFamily Confidence父親モデル

父親モデルでは、多母集団同時分析においてFamily Confidenceへのパス係数が「家族からのサポート」0.39と最も高く影響しており父親モデルの特徴的な側面であった。養育期において父親は、母親と比較して家族のサポートをより高く認識し(藤生, 2009)、子育てに関する第一義的なサポート源として母親があげられている(神庭, 2005; 片山ら, 2012)。父親は母親との会話を通して情緒的に安定し、役割の獲得・適応が促進されており(中村, 2016)、父親にとって家族からの成長の見守り、大丈夫と保証してもらえるサポートがあることが重要であり、Family Confidenceの高まりにつながっていく。また、父親モデルでは「家族の成功体験」のパス係数が高く、父親のFamily Confidenceに関連していた。松田(2005)は自己効力感を高める支援の性差の違いについて、女性は心理的な援助が有効であるのに対して、男性は成功体験がもてる援助が必要であることを報告している。Family Confidenceも同様に父親にとって家族の成功体験が多くあることがFamily Confidenceにつながっていく。

(2) 養育期におけるFamily Confidence母親モデル

一方、母親モデルでは、Family Confidenceへのパス係数が「家族の生活の質:外的側面」0.44と最も高く関連していた。母親は、実母や育児仲間からのサポートを得ることで育児肯定感が高まることが報告されており(中村, 2016; 森下, 2018; 山口, 2009)、母親にとって、実母等を含む親戚からのサポートがあることや、友人であるソーシャルサポートといった社会とのつながりがあることがFamily Confidenceを高めていく。また、ソーシャルサポートをえるとといった社会とのつながりがあることが、母親自身の自己効力感の高まりにもつながり(中村, 2022; 村井, 2020)、間接的にFamily Confidenceを高め

ていくのであり、母親にとって、社会とのつながりを含む「家族の生活の質:外的側面」は重要な関連要因であると言える。

2) 養育期におけるFamily Confidenceと「家族の生活の質:外的側面」「家族からのサポート」「自己効力感」「家族の成功体験」との関連

養育期におけるFamily Confidenceと4つの要因との関連について、ステップワイズ法による重回帰分析、共分散構造分析の結果に基づき以下に述べていく。

(1) 「家族の生活の質:外的側面」との関連

「家族の生活の質:外的側面」はステップワイズ法による重回帰分析において「FQOL:ソーシャルサポート」「FQOL:親戚関係」が関連していた。また、モデルでは、Family Confidenceへのパス係数0.38と最も高い結果であり、Family Confidenceモデルに最も寄与していた。「家族からのサポート」「自己効力感」「家族の成功体験」は「家族の生活の質:外的側面」に関連しあいながら、それぞれの高まりが他への高まりにつながっており、家族の外的な側面である生活の質と密接に関連していた。開放システムである家族は常に変化し、成長している動的な実態であり、家族の存続と成長を促すために必要なものを環境から取り入れ、吸収・修正しながら多くの情報や物質、エネルギーを選択的に放出しており、開かれた境界を有していることが重要である(Friedman, 2003)。家族が社会と結びついていくこと、社会との関わりをもつことがFamily Confidenceをより高めると共に「家族からのサポート」「自己効力感」「家族の成功体験」を後押しして更にFamily Confidenceの高まりにつながっていく。家族と家族を取り巻く環境との境界を適度に開放していく「家族の生活の質:外的側面」は、Family Confidenceを高めていくための鍵となるといえる。

(2) 「家族からのサポート」との関連

「家族からのサポート」は、ステップワイズ法による重回帰分析では「FS:助力」「FS:好意」「FS:注目」の因子が関連していた。また、モデルでは「家族からのサポート」はパス係数0.31でFamily Confidenceと関連がみられており、「家族からのサポート」があることがFamily Confidence

を高めていくといえる。家族は、安定性や援助、休息を提供し情緒面の調整を行い、発達課題や状況の危機などの日常生活の問題を長期にわたり継続的に援助している (Friedman, 2003)。家族からのサポートについて、Confidenceを高める重要な先行要件として膨大な数の文献がサポートをあげており (Davidhizar, 1993; Lindsey, 2005)、活用できるサポートを多く認識しているほどConfidenceが高められる。家族にとって家族からのサポートが得られるという信頼感が重要であり、家族の信頼を基盤に家族自身が家族サポートを認識することがFamily Confidenceに関連している。

(3) [自己効力感] との関連

[自己効力感] もまた、ステップワイズ法による重回帰分析の結果、「SE：失敗に対する不安」「SE：行動の積極性」「SE：能力の社会的位置づけ」の全ての因子が関連していた。モデルでは、家族員の [自己効力感] は、Family Confidenceとパス係数0.21で関連がみられており、システムである家族において (ベルタランフィ, 1973)、家族員の自己効力感が、家族全体のFamily Confidenceにも大きく影響していくといえる (Lydia, 2012; Gerard, 2008)。また、[自己効力感] は [家族の生活の質：外的側面] からのパス係数が0.34で関連がみられていた。先行研究において、自己効力感とソーシャルサポートおよび社会参加との関連が報告されており (江本, 2000; 青木, 2004)、家族員それぞれの [自己効力感] は、社会を取り巻くネットワークを含む [家族の生活の質：外的側面] の高まりにより、更に高められて、Family Confidenceに寄与していく。

(4) [家族の成功体験] との関連

一方、[家族の成功体験] は、モデルにおいてFamily Confidenceへのパス係数は、0.08とやや低い傾向にあるものの、ステップワイズ法による重回帰分析においてもFamily Confidenceと関連していた。経験がConfidenceのための重要な前提条件であり (Davidhizar, 1993)、家族の単なる経験の積み重ねではなく、好転や過去の行動の達成、危機的状況の乗り越え体験といった、家族にとって成功と感じる体験であることが重要であり (小林, 2006)、家族の成功がFamily

Confidenceには影響している。また、[家族の成功体験] は [家族の生活の質：外的側面] [家族からのサポート] からパス係数0.32、0.22で間接的に影響を受けていた。社会とのつながりがあること、また、適切なサポートが得られることが成功体験につながっていく (松尾, 2015)。家族の経験に関連した、よい方向への好転や過去の行動の達成、危機的状況の乗り越え体験といった家族の成功が、Family Confidenceと関連している (White, 2009)。

2. 養育期におけるFamily Confidenceを育む看護実践への活用

本研究結果より養育期におけるFamily Confidenceは、家族の様々なシステムとの関連の中で捉え、支援していくことの重要性が示唆された。社会システムとの関連である [家族の生活の質：外的側面]、家族内のシステムである [家族からのサポート] [家族の成功体験]、家族員の [自己効力感] を高めていく支援といった、家族内外の様々なシステムの階層性の視点を持ち、養育期におけるFamily Confidenceをより高めていくことが重要である。

また、父親と母親では異なる傾向がみられたことをふまえ、父親・母親に応じた支援が重要である。一方、家族役割について共に参加し、協力することが改めて求められており、性の多様化や性別役割を規定せず (山極, 2019)、広く育児・介護を担っていく考え方が広まりつつある。家族内においても性別役割を規定せず、個々の家族員や家族らしさが十分に発揮することができるように、本研究で明らかになった関連要因の側面を父親、母親共に高めていく支援も望まれる。

3. 研究の限界と今後の展望

本研究では回収率20.40%とやや低い結果であり、養育期における家族への一般化には限界がある。現代、家族は多様に変遷してきており、様々で複雑な状況における家族や、様々な家族の発達段階を対象としたFamily Confidenceに関する研究もまた、今後のぞまれる。

VI. 結 論

養育期におけるFamily Confidenceは「家族の生活の質：外的側面」、[家族からのサポート]、[自己効力感]、[家族の成功体験]と関連がみられ、養育期におけるFamily Confidenceモデルが明らかとなった(GFI=0.929、AGFI=0.902、CFI=0.954、RMSEA=0.063)。家族がFamily Confidenceをより高め発揮していくためには、家族内外の様々なシステムの階層性の視点からFamily Confidenceを高めていく支援が望まれる。

謝 辞

本研究にあたり、ご協力いただきましたご家族の皆様、対象者をご紹介いただきました研究協力施設の皆様に深く感謝申し上げます。本論文は、高知県立大学看護学研究科博士後期課程における博士論文を加筆修正したものであり、本論文内容における利益相反事項はない。

引用文献

- 青木邦夫 (2004)：在宅高齢者の社会活動性に関連する要因の共分散構造分析, 社会福祉学, 45(1), 23-34.
- 浅岡裕子, 山口桂子, 服部 淳子 (2020)：中高年女性が入院することによっていただく役割葛藤とその関連要因, 25(1-2), 90-101.
- 陳峻ぶん, 形岡 美穂子, 鈴木 伸一, 他 (2003)：広場恐怖を伴うパニック障害患者における一般性セルフ・エフィカシー尺度の特徴に関する検討, 心身医学, 43(12), 821-828.
- Davidhizar, R (1993): Self-confidence: a requirement for collaborative practice. *Dimens Crit Care Nurs*, 12(4), 218-222.
- Friedman, M (2003): *Family Nursing: Research, Theory, & Practice* (5th Edition), Prentice Hall, Upper Saddle River, N.J.
- 藤生君江, 吉川一枝, 神庭純子, 他 (2009)：核家族世帯における2歳以下の児をもつ父親・母親の育児機能 家事・育児協力の有無による比較, 岐阜医療科学大学紀要, 3, 195-202.
- Gerard, J., Marie, J (2008): Spousal Caregiver Confidence and Recovery From Ambulatory

Activity Limitations in Stroke Survivors, *Health Psychology*, 27(2), 286-290.

- 広井多鶴子 (2019)：教育と家族論の現在 核家族・近代家族・家族の個人化をめぐって, 教育学研究, 86(2), 300-309.
- 岩崎順子, 中野綾美, 野嶋佐由美 (2021a)：Family Confidenceの概念および関連要因に関する文献研究. 高知女子大学看護学会誌, 46(2), 13-23.
- 岩崎順子, 中野綾美, 野嶋佐由美 (2021b)：Family Confidence Questionnaireの開発, 高知女子大学看護学会誌, 47(1), 2-11.
- 江本リナ (2000)：自己効力感の概念分析, 日本看護科学会誌, 20(2), 39-45.
- 片山理恵, 内藤直子, 佐々木睦子 (2012)：乳幼児の母親と父親のソーシャルサポートと子育て観の関係と育児休業利用の実態, 香川大学看護学雑誌, 16(1), 49-56.
- 神庭純子, 藤生君江, 飯田澄美子 (2005)：養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究(第1報) 家族機能との関連性について, 家族看護学研究, 10(3), 68-77.
- 金正貴美, 野嶋佐由美 (2018)：人間のComfortへの関連要因の探索研究, 高知女子大学看護学会誌, 43(2), 1-14.
- 小林康江 (2006)：産後1ヵ月の母親が「できる」と思える子育ての体験, 母性衛生, 47(1), 117-124.
- 厚生労働省 (2020)：2019年国民生活基礎調査の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf>, アクセス：2022年2月2日)
- Lindsey, G., Kleiner, B (2005): Nurse residency program. An effective tool for recruitment and retention. *J Health Care Finance*, 31(3), 25-32.
- Lydia, W (2012): Caregiver Confidence: Does It Predict Changes in Disability Among Elderly Home Care Recipients?, *Gerontologist*, 52(1), 79-88.
- 牧野カツコ (2009)：子育ての場という家族幻想—近代家族における子育て機能の衰退—, 家族社会学研究, 21(1), 7-16.
- 松田晶子, 佐藤真理子, 張替直美 (2005)：糖尿病患者の性差による自己効力感の違いにつ

- いての検討, 山口県立大学看護学部紀要, 9, 17-23.
- 松尾綾, 前田由紀子 (2015): レジリエンスと問題解決に向けた行動特性との関連 看護大学生のインタビューからの比較検討, 西南女学院大学紀要, 19, 27-36.
- 森下順子, 厨子健一 (2018): 乳幼児をもつ母親の育児仲間からのソーシャルサポートと育児肯定感・育児負担感との関連性, 小児保健研究, 77(5), 476-482.
- 村井博子, 流郷千幸 (2020): 幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感と育児に対する自己効力感、ソーシャルサポートの関連, 聖泉看護学研究, 9, 27-33.
- 中村瑛一, 有本梓, 田高悦子, 他 (2016): 3歳児をもつ父親と母親における親役割達成感の関連要因, 日本地域看護学会誌, 19(1), 4-13.
- 中村美由紀, 流郷千幸 (2022): 第1子を出産後の母親の妊娠・出産・育児の満足度と第2子の妊娠・出産・育児への自己効力感との関連, 小児保健研究, 81(1), 45-52.
- 中野綾美, 宮田瑠理, 野嶋佐由美 (1998): 家族の生活の質に関する研究. 高知女大学看護学会誌, 23(1), 8-16.
- 中野綾美 (2005): 家族課題達成への支援, 野嶋佐由美編, 家族エンパワーメントをもたらす看護実践, 東京, へるす出版, 199-205.
- 野嶋佐由美, 岸田佐智, 中野綾美 (1993): 「家族からのサポートに関する質問紙」の開発, 高知女子大学紀要 (自然科学編), 41, 71-78.
- 野嶋佐由美 (2007): 家族看護 特集 家族の力を支える看護. 家族看護. 50(1) 6-12.
- ルトヴィヒ・フォン・ベルタランフィ (1973): 一般システム理論. 東京, みすず書房, 28-49.
- 坂野雄二, 東條光彦 (1986): 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 12, 73-82.
- 坂野雄二 (1989): 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討, 早稲田大学人間科学研究, 2(1), 91-98.
- 山極壽一 (2019): ジェンダーと家族の未来, 学術の動向, 24(12), 15-22.
- 山口咲奈枝, 遠藤由美子, 小林尚美, 他 (2009): 産後1ヵ月の母親の育児に対する対処行動の実態および対処行動と育児不安, ソーシャルサポートとの関係, 母性衛生, 50(1), 141-147.
- White K (2009): Self-confidence: a concept analysis, Nursing Forum, 44(2), 103-114.